

の西の方二三里を隔たる事と見ゆ、然らば戦場より淺草の石濱までは、十四五里も有べし、坂東道にして、八十里の内外の事なり、其道を義宗、人馬の息をも休めず是を追ひ、春の夜の短き頃、夜間に又小手指原へ引返され、三十里に及べる道をうたれし事、人力とは思はれず、もし此道筋に淵瀬をはかられぬ程の川ありし事とせば、則今下練馬と白子との間のながれを指けるものか、此邊までは戦場より六七里に及もすべし、しかば坂東道四十六七里といふも近かるべし、しかりといへども、石濱迄は此水よりしては、猶大ひに隔たりたりと見ゆ、公阿按すに、いかにも君美の説の如く、武藏野合戦の跡は、今川越街道成べし、しかれども川越よりは、はるかに江戸にちかく、練馬村、白子村の邊にもや有らん、今も練馬村に、今上しつけみといふ地名あり、其處に小手さし渡戸などいふ古名存し、古老はこの所こそ、いにしへの小手さし原の合戦の跡なりと云、もし練馬村にある所の小手さしを以て、武藏野合戦の跡なりとせば、石濱まで五六里に及び、太平記にいふ坂東道四十六里といふにも、や、符合せり、参考の爲に姑くこゝにしるせり。

〔北國紀行〕二月の初十九年文明鳥越のおきな、穢して角田川に泛びぬ、東岸は下總、西岸はむさしのにつゝけり、利根入間の二河おちあへる所に、彼古き渡りあり、東の渚に幽村あり、西渚に孤村あり、水面悠悠として兩岸にひとしく、晚霞曲江に流れ、歸帆野草をはしるかとおぼゆ、筑波蒼穹の東にあたり、富士碧落の西に有て、絶頂はたへにきえ、すそ野に夕日を帶、朧月空にかゝり、扁雲行盡て四域にやまなし。

浪の上のむかしをとへばすみだ川霞や玄ろき鳥の涙に

〔武藏國隅田川考〕按に鳥越は、いまその名のこりて、明神のたてる所なり、略中此利根川といふは、初にものする川に出るといへば、古隅田川にあらざることしるべし、○中此利根川といふは、初にものする